

日本とマーシャル諸島の学生シンポジウム 実施報告書(日本語版)

Japan-Marshall Islands Student Symposium (Majuro Symposium)



1. シンポジウム概要
 2. オープニングセレモニーの記録(東海大学)
 - 2-1. 団長挨拶
 - 2-2. 学生代表挨拶
 3. 各セッションのテーマと報告
 - 3-1. 異文化コミュニケーション
 - 3-2. 教育
 - 3-3. 海洋
 - 3-4. 農業
 - 3-5. 健康
 4. 事前準備(学生支援)の報告
 - 4-1. 全体指導
 - 4-2. 英語指導
 - 4-3. 歌唱指導
 5. 総括
- 編集後記



2024年3月24日

東海大学第53回海外研修航海 研修団

1. シンポジウム概要

- 名称とテーマ

日本とマーシャル諸島の学生シンポジウム（略称:マジュロ・シンポジウム）

テーマ「グローバル・シティズンシップ:日本とマーシャル諸島の学生がともに考える未来」

- 開催者

主催 東海大学

共催 マーシャル諸島短期大学

後援 国際機関 太平洋諸島センター

- 日時

2024年3月5日(火)

- 場所

マーシャル諸島短期大学

PO Box 1258 Majuro, Republic of the Marshall Islands, 96960

- 参加者

学生 118名(東海大学91名、マーシャル諸島短期大学27名)

教職員 21名(東海大学14名、マーシャル諸島短期大学7名)

- 事業の概要および目的

本事業は、東海大学およびマーシャル諸島大学の学生が実際に集い、両国の暮らしからグローバルな共通課題を見出し、協議を通じて知見や経験の共有を図るものである。

本事業では、次世代を担う大学生が国や立場の異なる他者と出会い、共通の関心事項についてともに考えあう経験を通して、能動的に社会に関与するグローバル・シティズンシップの育成に貢献することを目的とする。そのために、人権・食・環境・持続可能性等の幅広い分野から、両国の学生にとって身近に感じられる論題（トピック）を設定し、すべての学生が小グループにわかれて意見交換を行う。

なお、本事業は東海大学第53回海外研修航海プログラムの一環として開催される。

- スケジュール

9:45-10:30 船からCMIへ移動(CMIのバス)

10:30-11:15 オープニング・セレモニー

- 1) 研修団団長挨拶(八木英一郎)
- 2) CMI挨拶(Stevenson Kotton 副学長)
- 3) 来賓挨拶(在マーシャル日本大使館・田中一成特命全権大使)
- 4) 東海大学 学生挨拶(植松冬弥・佐藤寛之・田中鳳人・志津七海)
- 5) 東海大学 パフォーマンス(合唱「建学の歌」)
- 6) 東海大学より記念品贈呈(学生長 吉田真依)

11:15-12:00 CMI キャンパスツアー

12:00-12:50 昼食

12:50-13:40 学生セッション

13:50-14:10 クロージング・セッション

- 1) CMI パフォーマンス(合唱)
- 2) CMI より記念品贈呈
- 3) CMI 挨拶 (Vasemaca. A. Savu 教務部長)

14:10-14:40 CMI から船へ移動 (CMI のバス)

2. オープニングセレモニーの記録(東海大学)

2-1. 団長挨拶

お集まりいただきありがとうございます。

本日は、日本とマーシャル諸島の学生シンポジウムを「グローバル・シティズンシップ：日本とマーシャル諸島の学生がともに考える未来」というテーマで開催いたします。

東海大学では、半世紀に渡り、調査研修船、望星丸を用いて、約1ヶ月間学生が共同

生活を営む海外研修航海を実施してきました。コロナ禍でこの数年間は中断していましたが、今回、5年ぶりに再開しました。日本を出た最初の寄港地がここマジェロとなります。

今回このシンポジウムは、東海大学およびマーシャル諸島大学の学生が集います。彼らは両国の暮らしからグローバルな共通課題を見出し、協議を通じて知見や経験の共有を図っていきます。そして、大学生が国や立場の異なる他者と出会い、共通の関心事項についてともに考えあう経験を通して、能動的に社会に関与するグローバル・シティズンシップの育成に貢献していきます。そのために、異文化コミュニケーション・教育・海洋等の幅広い分野から、両国の学生にとって身近に感じられる論題(トピック)を設定し、すべての学生が小グループにわかれて意見交換を行っていきます。普段、顔を合わせる事のない両国の学生が交流することで、それぞれの学生に新たな気づきが生まれれば良いと考えます。

最後になりましたが、今回の開催にご尽力いただいたマーシャル諸島大学の関係各位に深く感謝致します。本日のシンポジウムが有意義なものになることを祈願して挨拶とさせていただきます。

(団長：八木英一郎)



2-2. 学生代表挨拶(4名)

● 建築都市学部土木工学科 2年次 植松冬弥

はじめまして。私たちは日本の東海大学からきました。東海大学は、日本で一番学部の数が多い私立大学の一つです。日本に7つのキャンパスがあり、学生は約3万人います。その中で、今回の研修には、航海、英語、コミュニケーション、観光など、人それぞれの理由で参加しています。日本からマジェロに来るまで、91人の東海大生が13日間船に乗り、共同生活をしてきました。ほとんどの人が初対面でしたが、一緒に食事をしたり運動や雑談をして、仲良く



なっていました。また、シンポジウムに向けて、英語を学んだり、マジュロについて調査をしてきました。昨日マジュロに上陸し、想像以上に海と自然がきれいで、さらに興味がわきました。今日のシンポジウムでは、マジュロの暮らしや文化について、さらに深く学んでいきたいと思います。

● **海洋学部海洋理工学科海洋理工学専攻 1年次 佐藤寛之**

ここから、このシンポジウムが私たちにとっていい機会なのかを話していきます。最近、私たちの地球では数えきれないほどの問題に直面しています。気候変動、人口過多、戦争・紛争、エネルギー問題など。その一方で、希望もあります。その希望とは私自身であり、あなたであり、この会場にいるすべての人が希望なのです。私たちは未来への希望の燈火であり、よりよい世界を作ってゆける強い力を持っています。日進月歩の科学技術の進歩によって、私たちはオンラインで会うことができます。しかし、オンラインにはコミュニケーションの限界があります。具体的には、相手の感覚（感情）や細かな表情を読み取るのが難しいです。顔を見合わせて話す場（議論する場）には、オンラインにはない特別な力があります。さて、私たち東海大学の学生と団役員は、海を渡ってどのようによりよい未来を作ってゆけるかを議論しに来ました。今日まで私たちは偉大なる地球の自然の一つである海、山々、多種にわたる生物達を見てきました。また、私たちは激しい船酔いと人の優しさ、今まで見たことのない文化や景色を経験してきました。何をみて、何を考え、何を感じたのかをこのシンポジウムで共有しましょう。オンラインにはない「アナログ」な形で顔と顔を見合わせて、目と目を合わせて私たちは楽しく話をしましょう。今回のような深く話し（議論し）、考えを共有できる場はとても貴重です。今日のシンポジウムは、明日のよりよい未来を作ってゆくでしょう。



● **文学部英語文化コミュニケーション学科 2年次 田中鳳人**

私は、シンポジウムを通して多くの意見を交換し、友達を増やしたいです。特に、オンラインの時代だからこそ、直接顔を合わせる機会は貴重だと思います。そのために、たくさんコミュニケーションを取りたいです。それをすることで、お互いに想像することの出来なかったことを知る事ができるでしょう。また、東海大生についても、もっと知ってもらいたいです。東海大学からは多くの学生が参加しているので、多様な出会いがあるでしょう。英語が苦手な人が多いですが、私たちも頑張ります。短い時間ですが、このシンポジウムを通して、東海大生と仲良くなってください。一度きりのこの機会を、皆さんと一緒に楽しみましょう。



● **体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科 2年次 志津七海**

これから私たちが歌う「建学の歌」の紹介をします。この曲は4分間です。建学の歌は、全てのキャンパスで歌われています。東海大学は、航空科学専門学校から始まりました。この曲は、大学を設立した松前重義が作詞しました。彼は、この曲に学生への期待を込めています。この曲は大学が開校してまもない、1943年につくられました。歌詞には、松前の理想の教育が含まれています。実際に、思想・科学・技術という単語が含まれています。くわえて、この曲には富士山や三保の松原のような日本の世界遺産が表現されています。ところ



で、私のお気に入りの歌詞は「進め希望の星仰ぎ」です。この歌詞には、希望を持ち未来へという意味が込められています。この歌詞は私を勇気づけてくれますし、さらに、私たちの乗っている船、望星丸の名前の由来も含まれます。「建学の歌」の素晴らしいメッセージを聴いてください。

3. 各セッションのテーマと報告

3-1. 異文化コミュニケーション

①論点

Keywords: Country, Stereotype, Ethnocentrism, Nationality, Miscommunication

Q1- What are the challenges?

- What are the problems when people are ethnocentric?
- What are the problems when people stereotype others?

Q2- How to help solve the problems?

- How can we help people not be ethnocentric?
- How can we help people not stereotype others?

Q3- What message do you have for the people you have met today?



②参加学生の感想（匿名）

マーシャル諸島の CMI 学生とシンポジウムを行った。その中で学校見学や CMI 学生との食事を行った。食事後に 5 つのテーマに分かれてグループディスカッションを行った。私は「異文化コミュニケーション」というテーマでディスカッションを行った。お互いの考えていることの差異を理解することができた。クエスチョン 1 ではステレオタイプについてである。ステレオタイプについて同じようなことを考えているようであったものの、感じる場面に違いを感じお互いが衝撃を受けた。クエスチョン 2 では解決策について話をした。これについてはお互いが同じことを思っているのだと感じた。

ディスカッション終了後、アニメの話で盛り上がることもできた。ジブリ作品についてよく盛り上がったのを覚えている。日本とマーシャル諸島の共通の話題がアニメの話であり、とても楽しい時間を過ごすことができた。

3-2. 教育

①論点

Key Words: Basic Education, Community Education, Knowledge and Skills, Experience, Relationships

Q1- What are the challenges?

- At schools (basic education)
- In Communities

Q2- How to help solve the problems?

- How can we help all children to learn as college/university students ?
- What can we do to make communities better as young adults?

Q3- What message do you have for the people you have met today?

②参加学生の感想（匿名）

CMI の意見として、教育現場と教師が少ないという問題があげられた。特に、教師が少ないということには、大きな共感を得ることができた。シンポジウムで同じグループであった CMI の学生が学んでいる分野の先生は二人しかいないようで、東海大学と比べるとかなり先生が少ないことが分かった。解決方法として、CMI で学んでいる生徒が海外に出て専門分野について学び、再び自国に帰って教育してほしいと語っていた。現在は、アメリカからの支援で成り立っているようだ。しかし、学費が高く、みんなが教育を受けることができていないため、政府や、教育が進んでいる生徒からの支援が欲しいと語っていた。

シンポジウムを行っての感想として、英語力を痛感するような内容となった。こちらの意見がうまく伝わらない場面があった。しかし、言語の壁を感じつつも有意義なシンポジウムを行うことができてよかった。



3-3. 海洋

①論点

Keywords: Seaweed, Fish Farms, Microplastics, Processed Products, Fishery Resources

Q1- What are the challenges?

- What problems are caused by microplastics on the marine environment?

Q2- How to help solve the problems?

- How can we make better use of our marine and fishery resources?

Q3- What message do you have for the people you have met today?

②参加学生の感想（匿名）

シンポジウムを終えて、英語での海洋問題についての議論は他の議題と比べて容易い方だったかなと思えた。海洋問題については誰もが知っているため、多くの意見が出て会話が止まることはなかった。マジュロでのゴミの問題は街を散策してもその深刻さが窺えることから、CMI の学生も他人事のように捉えるのではなく真剣に向き合っていた。日本とマーシャル諸島共和国、両方の特徴である島国という点から、豊かな海洋の生態系を例えに用い、海洋生物目線からの意見も多く出た。プラスチックゴミが海に流出することで起きる事の例えに、各国の経済面からの意見を述べている人もいて様々な視点からゴミによる汚染問題について論じることが出来たのではないかと考えている。CMI の学生との今回の会話は両者の海洋問題に対する己の考えを見直す良い機会になったのではないかと思う。また、他国の人と一緒に考えることで、世界が丸となって取り組むべき問題であると再認識する機会でもあったと思う。



3-4. 農業

①論点

Keywords: Water, Plants, Nutrition, Soil, Urine and Feces

Q1- What are the challenges?

- What kinds of problems with soil are there in island countries?
- Why healthiness of soil is important in producing foods?

Q2- How to help solve the problems?

- What can we do to protect soils?

Q3- What message do you have for the people you have met today?



②参加学生の感想（匿名）

同じ島国である日本とマーシャル諸島の農業における課題の違いを知ることができた。日本は島国だが、土壌も水資源も豊富であり、昔から農業が盛んな国であった。CMI の学生からはこのような資源不足が問題点として挙げられた。

実際にマーシャル諸島では、土を輸入したり野菜を自国で育てずに海外からの輸入に頼ったりすることでこの問題に対処しており、結果として野菜類が高価になるといった問題が発生していた。CMI の学生はこの野菜が高価になる問題に対しても対処策挙げており、その策は野菜をお店で買うのではなく各個人で育てて供給するというものであった。日本における土壌の問題として家畜飼料輸入増大による堆肥の増加とそれに伴う土壌の栄養過多について挙げ、その解決策として、火力発電への推の利用を紹介した。しかし、うまく伝わったか不明であり、共感を得ることはできず残念であった。ただ自分ができる精一杯の交流ができたためそこは良かった。

3-5. 健康

①論点

Key Words: Vaccine, Remote, Insurance, Medical expense, Preventive care

Q1- What are the challenges?

- What kind of problems do people have using medical services in your country? Especially for whom, for where, and what expenses (i.e., Covid 19 pandemic).

Q2- How to help solve the problems?

- What can be done to prevent problems of access to medical services?

Q3- What message do you have for the people you have met today?

②参加学生の感想（匿名）

私がマジュロの学生とのディスカッションで感じたことは、日本とマーシャル諸島共和国には大きな医療格差があるということだ。日本では過疎地域や離島などには病院が少ないが、比較的医療にアクセスすることはたやすい。しかしマジュロには病院と診療所が 1 つずつしかなく、医師や看護師の数が十分ではないという。ディス



カッションした CMI の学生は医学を専攻しており、CMI を卒業後、海外留学して医師になり、マジュロのために働きたいそうだ。医師免許を取れるような教育機関がマーシャルにはなく、そういった点においても日本は恵まれていると思った。ただ、医療費を増やしたいというのは両国共通の課題だった。私は自分自身がかかり恵まれた環境で生活したり、勉強したりできていることを実感し、今以上に努力しなければならないと感じた。交流できた時間は短かったが、知らなかった国の同じ勉強をする人と話をすることができたのがうれしかった。

4. 事前準備(学生支援)の報告

4-1. 全体指導

- シンポジウム設計の意図

本シンポジウムを設計するにあたって、重視したのは以下の2点である。第一に、異文化交流にとどまらず、大学生の立場から学術的な議論に挑戦することである。とりわけ、専門教育内のプログラムではなく、多様な所属・背景の人が集まって共通テーマについて意見を交わす機会は貴重であり、海外研修航海の特徴を活かした行事として企画された。第二に、英語の苦手な学生や交流に消極的な学生を含めて、全員の参加を可能にすることである。そのため、小グループでのディスカッションという方法を用いることとした。



- 準備過程

2/26 から 3/5 まで、以下のスケジュールで準備を進めた（太字がシンポジウムに直接関連する部分）。同時に、シンポジウム担当の行事班（25 名）が運営上の役割を分担し、各セッションの取りまとめや大学紹介の資料作成、CMI 学生へのプレゼント作成、学生代表スピーチの準備などにも取り組んだ。



	午前	午後	夜
2/26			Kick Off Meeting for Symposium
2/27	洋上講座	ロープワークなど	English Class1(基礎英会話)
2/28	洋上講座	ロープワークなど	English Class2(基礎英会話)
2/29	洋上講座	ロープワークなど	マジュロ入国準備
3/1	English Class3 (A/B) セッションテーマ	「建学の歌」練習 1 Symposium Practice 1	Symposium Practice 2 (セッション PPT チェック) 行事班による準備
3/2	English Class4 (A/B) セッションテーマ	「建学の歌」練習 2 Symposium Practice 3	Symposium Practice 4
3/3	English Class5 (A/B)	大掃除	マジュロ事前調査発表

	(実践英会話・単語クイズ)	Symposium Practice 5 (リハーサル)	
3/4	マジェロ入港	寄港地研修	寄港地研修
3/5	シンポジウム【本番】	出国審査	

- 考察

当日の様子を踏まえて、成果と課題を述べる。成果としては、まず、全員がグループに入り役割をもつことで、CMI 学生と直接関わることができた。また、ランチタイムでの気軽な交流からセッションに入ったことで、準備していたものを発表するよりも自然な会話として意見交換ができた。準備では緊張や消極性を見せていた学生も、CMI 学生を前に積極的に話しかける場面がよく見られ、自分の英語が通じること・相手の言っていることが理解できることへの驚きや自信を感じる機会になったと考えられる。

他方、課題としては、船上での準備の難しさが自覚された。船の揺れが大きく、最大で 1/4 程度の学生が欠席となる場面もあったこと、英語が続く日は一部の学生にとってストレスになった可能性があり、学生の負担を考慮して計画する必要がある。また、言語を問わず、普段の授業を通じて準備物を発表することには慣れていても、議論する経験の不足が明らかになった。議論する経験をどのように豊かなものにするかは、今後の教育上の課題である。

(団役員：池谷美衣子)

4-2. 英語指導

- 準備の概要

シンポジウムに向け、総勢 14 の学部、91 人のノンネイティブの学生たちに向けて準備を進めた。多くの東海大学生は英語を使うのを躊躇してしまう。彼らに必要な正しい文法と語彙を学ぶことで何を言えばいいかの助けになる。学生に対して、基本的な文法や表現について学ぶ初歩的な授業 5 回と、シンポジウムの議論に必要な語彙などを教える補助的な授業 4 回を行った（各 45 分）。シンポジウムにあたって、学生はテーマに沿った 5 つの大きなセッションに分かれ、さらにセッションの中を 4 つの小グループに分けた。したがって、小グループは CMI の学生 1~2 名を含んだ 4~5 人の構成になっている。

- 英語の授業の流れと構成

学生の助けとなる事前の英語の知識として、複数回の英語の授業にて深掘りを行った。第 1・2 回の授業では、CMI の学生との交流の上で手助けとなる基本的な表現や自分の意見を基盤とした会話の練習を行った。これらの授業は、学生に自分たちの知っているシンプルな語彙で 45 分間のシンポジウムで話ができるようになることを目的とした。多くの言語学習において、学生たちは全てを暗記しようとする。第 3・4 回の授業では、学生らは自分たちの大学や各セッション分野（異文化、教育、海洋、農業、健康）に関する情報についての語彙と表現を学んだ。第 3 回の授業では、日本語で考えたシンポジウムに必要な単語や情報などを英語に訳す作業を行った。第 4 回では、意見を改めて復習し実際にアウトプットすることに重点を置いた。計 4 回の補助的な授業（シ



ンポジウムの準備)では、学生らにさらなる練習の機会と、彼らが議論やテーマに使うような語彙を見直す機会を与えた。最後の授業では、マジュロに着く前に学生らが基本的な旅行などで使えるフレーズを練習し、クイズ形式で語彙などを復習した。

● 結果

最も大きな問題として学生は普段は英語を使う脳ではなく、日本語を使う場面が多い。そのため、シンポジウムに向けて学生らが英語を使う脳になるようひとつずつ学んでいった。学生らが知っている語彙や文法を使って自信を持って会話できるよう、指導・補助をしていった。シンポジウムでは、東海大学生とCMIの学生らは、テーマに対して驚くべき高度な議論を展開していった。彼らは失敗を恐れずに、簡単な文法や簡単な表現で議論を展開し、結果として彼ら自身のコミュニケーションはとても上手くいった。くわえて、はじめは自転車の補助輪を付けて走ることから補助輪を外して走る様に、徐々に指導から離れてゆき、学生自身が「できた!」と自信を持つようになった。最終的には英会話において素晴らしい感覚をCMIの学生らと共に身に付けることができた。

(団役員：ウェイン・デビット)

4-3. 歌唱指導

〈建学の歌〉は、東海大学の全ての関連校で愛唱されている歌である。東海大学の前身である専門学校が開校して間もない1943年5月頃に、創設者の松前重義が若者への期待を込めて作詞したとされる。作曲は、近代日本の楽壇を代表する作曲家の一人である信時潔が担当した。

今回、シンポジウムのオープニングセレモニーの中で、この〈建学の歌〉を披露することが決まり、歌唱指導を専門とする私が指導を行うこととなった。学生同士が船内で共同生活を送る最中という特殊な環境下ではあるものの、今回は約20分間の練習を合計3回実施することができた。初回の練習時から、比較的生の出る学生が多く、私としては救われる思いであった。一方で、オリジナルは二重唱であるが、練習回数を鑑みて今回は斉唱で演奏することにした。指導にあたり特に心がけたことは、①詩の各節(1番から4番)に込められた情景等を思い描きながら歌唱すること、②楽曲を支配するモチーフの特徴的なリズムを意識して歌唱すること、の2点である。特に、リズムは世界中の音楽に共通する要素であることから、詩の内容を伝えることは難しくとも、CIMの方々とこの楽曲のよさを共有することが可能なのではないか、という思いから積極的に指導した事項である。



当日は、風の強い屋外という悪条件ではあったものの、殆どの学生が美しい歌声で歌唱していたと思う。私たちが歌唱する姿を動画で撮影するCMIの学生たちの姿が多く見られた。今後の課題としては、今回は練習回数の都合で見合わせた、本来の演奏形態である二重唱に挑むことを上げたい。

(団役員：三沢大樹)

5. 総括 (行事班 責任者のコメント)

シンポジウムの準備は約1週間前の2/26のキックオフミーティングから始まった。シンポジウム行事

班としては学生に手渡しするプレゼントの準備、学生代表スピーチの原稿の調整・練習、シンポジウム内で使用する資料の作成等を実施。全体としては Wayne 先生が講師を務める英語クラスでの基礎英語及び、シンポジウムの内容の深堀を行った。

行事班は俊敏に、そして柔軟に準備を進めることができ、想起の予定よりも早く準備を済ませることができた。特に学生スピーチを担当した学生は原稿の書き下ろしが早く、ゆっくり、そしてわかりやすく伝えるための練習に時間を費やすことができた。スピーチは基本暗記をして、かっこよく話そうというのが代表スピーカー4人共通の目標であった。が、なかなか上手いかず、細かい発音、話すスピードや間の取り方に苦戦した。学生代表スピーカーの一人である志津七海さんは、次のように振り返る。「英語がわからない中でスピーチ代表となったので原稿を考えるとところからすごく大変だった。日本語では覚えられても英語では文型が違って、順番が変わってしまうので覚えるもとても大変だった。」4人での合同練習、リハーサル、個人練習部分も含め、スピーチの準備はシンポジウム前日まで続いた。

特に行事班全体で総力を挙げて取り組んだのは、CMI の学生に渡す手作りのプレゼントだ。プレゼントは学生の好きな・贈りたい漢字一文字を筆で描き、折り鶴を入れた額縁だ。漢字は一人一人違い、字の上手い下手も関係なく、皆自分なりの想いをこめ、思い思いに制作した。



全体としての英語クラスは全学生 91 人が学生食堂に集合し、Wayne 先生を主体に授業を行った。英語クラスの初回は皆右も左もわからない状況であったが、Wayne 先生の支援・指導によって教室は熱気に包まれ、自分なりの言葉で会話の練習に取り組んだ。英語の授業も回数を重ね、いよいよシンポジウムの深掘りの回及びシンポジウムの練習となると…話は違った。各テーマで扱う内容は様々で日本語でも考えるのが難しい内容であったため、話し合いは難航した。たとえば「異文化コミュニケーション」では、偏見をもつことによつてどのような問題、障害が生じるかという問いを扱った。まずは議論する内容を日本語にて話し合い、各グループで意見をまとめる。その後、意見を英語に訳し、実際のシンポジウムの形で練習するといった流れだ。まずは日本語でどこから議論すればよいか、手探りの中話し合いは進んでいった。話し合いの中では英語の上手い、下手関係なく意見を出し合い、よい方向へと前進していった。次に日本語を英語に訳す作業では各グループの学生が知っている単語を上手く組み合わせながら、時には専門の教員の手も借り、英語にて意見をまとめることができた。そしていよいよシンポジウム実践練習。手元にグループでまとめた英語の意見メモがあっても、いざ実践となるとなかなか言葉が出てこない。そこでウェイン先生は「文法は気にせずに、単語だけでもいいから積極的に話していこう！」と全体にアドバイスを投げかけた。その後は全体を通して、英語の議論がとても活発になった。マジュロ入港前日のリハーサルを終え、研修団は今できる限りの最善の準備を終えた。

1日目の地上研修を終え、いよいよ2日目のシンポジウム本場を迎えた。当日はCMIまでの移動に遅れが出たものの、開会式を実施することができた。CMIの教授、団長、学生代表スピーチ、CMI副学長の流れで進んだ。学生代表スピーチは何回も練習した甲斐もあり、かっこよく、そして自然に話すことができ、各学生のスピーチが終わった際には温かい拍手を頂いた。開会式を終えCMIの学生によるキャンパスツアー、後に昼食をとりシンポジウムを午後から始めた。キャンパスツアーの中で私が特に感動したのはCMIの教育目標、即ち哲学である。東海大学ならば「建学の精神」といったところだろうか。CMI

の学長室がある施設には伝統的な海図とアウトトリガーカヌーの模型が展示されている。学生曰く、この2つでセットでCMIの哲学「CMIを卒業した学生が案内人となってゆく」という思いが込められているとのことだ。彼らの祖先が海図を用い、アウトトリガーカヌーを使って大波を超えていったように、CMIの学生がマーシャル諸島、そして世界を導いてゆく存在となってゆくことを示している。私はこの考え方、哲学にとっても感動した。



シンポジウムのセッションは東海大学の学生から自分たちの大学についての紹介、セッションの話題提供、議題に対しての議論の流れで約30分間行われた。小グループの一人ひとりが役割を持ち、シンポジウムを進行していった。全体の雰囲気はとても柔らかく、そして明るいものであった。その空気感の中で、各グループでは活発に意見交換が行われた。私のグループ内の議論を通してわかったこととして日本とマーシャル諸島(マジュロ)で生じている問題には共通点があることだ。もちろん内部事情や文化の背景を持つ問題は別である。例として混血、いわゆるハーフ(またはミックス)に偏見をもつ人が多く、それによって差別や非難などの問題が生じていることがグループで挙げられた。時間はあっという間に過ぎ、シンポジウムの時間は終わりを迎えた。

その後は閉会式が行われ、CMIの学生から素敵な歌と伝統的なアクセサリのアミノ(日本語の編み物と同じ発音)を頂いた。歌はとても温かく、どこか日本の島唄に似ているようにも感じた。CMIの教授は最後に次のように話した。「今日新たな時代のページがめくられました。今日のシンポジウムで関係を終わらせるのではなく、SNS等を通して是非積極的な学生同士の交流を続けてください。私たちは同じ太平洋の島々の仲間なのです。もしマジュロにまた来た際は是非、顔を出して「シンポジウムにいた学生です」と言ってください。私たちはいつでも歓迎します。」お話の後バスが出発するわずかな時間を使って、学生同士は写真を撮り合い、連絡先を交換した。



シンポジウムは大成功に終わり、皆笑顔でマジュロを発った。シンポジウムに向けた英語の授業が嫌いで、「もうやりたくない」と嘆いていた学生も、終わったあとは「めちゃ楽しかった!!」と笑顔で言った。そしてCMIの学生も同じく喜びの気持ちであると考え。学生同士で撮った写真を見ると彼らの「楽しさ」がこちらにも伝わる。本航海での異文化交流は地元の人と遊んだり、観光地を巡ったりするものではなく、「シンポジウム」という学術的なものであった。普段日本語を基本に話す私たち東海大学生にとっては大変挑戦的であったが、「英語で互いの抱える問題点について議論する」という目標に向かう過程で大きく成長することができた。過程のみならず、シンポジウムにて議論することによって世界における自分の立ち位置を再認識し、議題についてより深めることができた。なにより、東海大学生全員が「英語を使っ



て学術的な議論をした」という大きな自信を得ることができた。

今回のシンポジウムをもとに、太平洋諸島をはじめとした多くの国々の学生同士の交流が活発になることを私は望む。交流によって自国を客観的に分析し、自分自身の世界における立ち位置を考える。それは即ち、どう行動するか、どう生きるかに直結する。望星丸には様々な学年、背景を持つ学生がいる。中には4月から社会人になる人もおり、下船後にはひとりひとりが新たな道を歩んでゆく。その一步一步の中で、人生の選択の中で今回身に付けた「世界を眼る（みる）力」が役にたっていき、よりよい未来を私たち自身が作ってゆくだろう。最後となるが、この場を借りて英語の授業を担当してくださったWayne先生、シンポジウムの運営・計画から本番までサポートしてくださった池谷さん、建学の歌の指導をしてくださった三沢先生、そして本シンポジウムに関わった全ての方々に感謝します。ありがとうございました。



(海洋学部海洋理工学科海洋理工学専攻 1年次 佐藤寛之)

編集後記(行事班 報告書担当者のコメント)

- 私は正直、シンポジウムを聞いて最初は何を行うのか全くイメージが湧かなかった。しかし、シンポジウムを通して様々なことを学んだ。例えば、プレゼンテーションの原稿を簡潔にしてまでも伝えたいことを相手に伝えようとする心が大切であることや低い英語力でも相手に伝わることを学んだ。この経験をもとに、私は英語力をさらに鍛え再び海外の人とコミュニケーションを取りたいと思った。(工学部機械システム工学科 2年次 小俣慎太郎)
- 私は、もともと英語がとても苦手で、英語から避けるような人生を歩んできたため、今回のシンポジウムは不安がとても大きかった。しかし、班員と何度も練習をしたことで段々と英語への抵抗がなくなっていった。シンポジウム当日、現地の学生と話し合ったとき、全ての内容はわからなかったが、拙い英語ながらもコミュニケーションをとることができた。シンポジウムを経験し、英語を上手く話そうとしていたことが馬鹿馬鹿しいものだと気づかされた。(観光学部観光学科 2年次 秦結愛)
- 私のシンポジウムのテーマは健康だった。東海大学紹介、今回のシンポジウムのトピック紹介、質問1、質問2、質問3の順に行った。私は質問2と質問3のリーダーを務めた。私たちは新型コロナウイルスについて議論した。質問2は質問1で議論した新型コロナウイルスが流行した際に起こった課題の解決策を話し合った。質問3ではシンポジウムでの話し合いのまとめと写真撮影をした。今回で国は異なっても同じような課題を抱えていたのだと感じた。例えば、学校に行けない、友達に会えないなどである。マジュロのように共通点も相違点もある国の人々と話す機会はとても貴重で楽しい時間であった。(工学部医学工学科 1年次 蓮見佳子)
- 私は異文化コミュニケーションについてシンポジウムを行った。しっかり準備を行ったためCMIの学生と多くの意見交換ができた。Ethnocentric と stereotype の概念を伝えるのに苦労した。しかしながら拙い英語でもお互いの意見を理解できたことはよかった。また、シンポジウム以外でも会話を楽しむことができ英語を学ぶモチベーションになった。他のテーマのシンポジウムを行ったチームの感想を聞いて、マーシャル諸島と日本の違いを多方面から確認することができた。(工学部動力機械工学科 4年次 寺井珠海)

日本とマーシャル諸島の学生シンポジウム

実施報告書(日本語版)

編集 東海大学第53回海外研修航海研修団

発行 2024年3月24日

(写真提供 団役員 松島佑介/写真・動画クラブ)

Japan–Marshall Islands Student Symposium (Majuro Symposium)

Report (English ver.)



1. Outline of Majuro Symposium
 2. Opening Ceremony Speech (by Tokai univ.)
 - 2-1. Speech by the Leader of the 53th Overseas Educational Cruise
 - 2-2. Speech by student representatives (4 students)
 3. Discussion Themes and Comments from Each Sessions
 - 3-1. Intercultural Communication
 - 3-2. Education
 - 3-3. Marine
 - 3-4. Agriculture
 - 3-5. Health and Welfare
 4. Preparations and Support for Symposium (from Teachers)
 - 4-1. Purpose and Planning
 - 4-2. Communication and Discussion in English
 - 4-3. Singing as the Performance
 5. Overall review by the Symposium Leader (Student)
- Editor' s Postscript (Students)



Mar 24 2024

Tokai University

The 53th Overseas Educational Cruise

1. Outline of Majuro Symposium

- Title and Theme

Japan-Marshall Islands Student Symposium (Majuro Symposium)

“Global Citizenship: Students from Japan and the Marshall Islands Considering the Future”

- Organizer

Host Tokai University

Co-host College of Marshall Islands

Sponsorship International Organization Pacific Islands Centre

- Date

March 5, 2024 Tue.

- Venue

College of Marshall Islands

- PO Box 1258 Majuro, Republic of the Marshall Islands, 96960

- Participants

Students 118 (Tokai 91, CMI 27)

Faculty and Staff 21 (Tokai 14, CMI 7)

- Purpose and Overview

This project intends to: bring together students from Tokai University and the University of the Marshall Islands; and share knowledge and experiences through discussions on common global issues that students from both countries are familiar with.

The purpose of this project is to contribute to the development of global citizenship in which university students are actively involved in society through the experience of meeting others from different countries and positions and thinking together about issues of common concern. For this purpose, we will set topics from a wide range of fields such as human rights, food security and diet, the environment, and sustainability that are familiar to students from both countries, and all students will be divided into small groups to exchange opinions and ideas.

This project will be held as part of the 53rd Overseas Educational Cruise Program by Tokai University.

- Schedule

9:45-10:30 Move to CMI (by CMI school bus)

10:30-11:15 Opening Ceremony

1) Speech by the Leader of the 53th Overseas Educational Cruise

2) Welcome Speech by Vice President Stevenson Kotton of CMI

3) Guest Speech by ambassador extraordinary and plenipotentiary Kazunari Tanaka of the Japanese Embassy in the Marshall Islands

4) Speech by student representatives (4 students)

5) Performance from Tokai (School Founding Song)

6) Presentation from Tokai (Student Rep. Mai Yoshida)

11:15-12:00 CMI Campus Ture

12:00-12:50 Lunch

12:50-13:40 Students Sessions

13:50-14:10 Closing Session

1) Performance by CMI (Song of Gratitude)

2) Presentation by CMI

3) Speech by Dean of Academic Affairs Vasemaca. A. Savu of CMI

14:10-14:40 Move to Ship (by CMI School Bus)

2. Speech in Opening Ceremony (from Tokai univ.)

2-1. Speech by the Leader of the 53th Overseas Educational Cruise

Thank you all for gathering here today.

We are holding a student symposium between Japan and the Marshall Islands under the theme "Global Citizenship: Students from Japan and the Marshall Islands Envisioning the Future."



For over half a century, Tokai University has been conducting overseas training voyages using the research training ship, the "Bosei-maru," where students live together for about a month. Although interrupted due to the COVID-19 pandemic in recent years, we have resumed this tradition after a five-year hiatus. Majuro is our first port after leaving Japan.

This symposium brings together students from Tokai University and the College of the Marshall Islands. They will identify global common issues from the perspectives of both countries' lifestyles and seek to share knowledge and experiences through discussions. By actively engaging with others from different countries and backgrounds, and by collectively considering common interests, students will contribute to the cultivation of global citizenship. To achieve this goal, topics ranging from intercultural communication, education, marine, and other relevant fields have been set for students from both countries to discuss in small groups. We hope that through this exchange, students who do not usually interact with other from different cultures will gain new insights.

Lastly, I would like to express deep gratitude to all those at the College of the Marshall Islands who have contributed to the organization of this event.

With these words, I hope that today's symposium will be fruitful. Thank you.

(Leader : Eiichiro Yagi)

2-2. Speech by student representatives (4 students)

- Toya Uematsu (Department of Civil Engineering 2nd year)

It's nice to meet you all here at CMI. We came from Tokai University. It's one of the largest private universities in Japan. It has about 30'000 students attending 7 campuses. From among these campuses, we participate in this cruise for many different reasons such as wanting to take a voyage, learning English, studying communication, and learning tourism. From Japan to Majuro .91students have been on a ship for 13days and lived together. Most



of the people met for the first time. But they have become friends after eating, exercising, and chatting together. Also, for the symposium, we learned English and researched Majuro. We landed in Majuro yesterday. The sea and nature were more beautiful than I imaged. And I was even more interested in this paradise. At today's symposium, I would like to learn more about the life and culture at Majuro.

- Tomoyuki Sato (Department of Marine Science and Ocean Engineering 1st year)

From now on, I'd like to talk about why this symposium is a good opportunity for us. Nowadays, our planet has uncountable problems, for example, climate change, overpopulation, war, gender gap, energy sources, among others. But there is hope. It's us. Me, you, and all of you. We are the shining beacon of hope of humankind, and we have a strong spark for making better world. With our advanced technologies, we can easily meet online. On the other hand, there are limits to such types of



communication such as difficulty reading feelings and details of facial expressions. I think face to face style discussions have a special power that online does not. So, our Tokai University students have come from overseas to discuss how to make a better future. So far, we have seen some of the great wonders of the earth like the ocean, mountains, and a variety of animals. And we have also experienced seasickness, but it is the kindness of people, and the chance to experience new cultures and scenery that we never see before that makes it all worth it. Let's share what we see, what we think, what we feel at this symposium. Face to face, eye to eye we can talk a lot and have fun in an "analog" way. This opportunity is rare to deeply talk and share our thoughts.

Our today's symposium will make better tomorrows.

- Takato Tanaka (Department of English 2nd year)

I would like to exchange many opinions through this symposium and make more friends. In particular, I think that this is a valuable opportunity to meet face to face because it is online era. That's why I want to communicate with as many people as possible. By doing this, we can know more about each other and learn about ourselves in turn. Also, I would like you to know more about Tokai University students. Many students from Tokai University will participate,



today. I hope they will enjoy this encounter as much as myself. Many people from my University are not confident with English, but we will try our best. It's a short time, but please make friends with Tokai University students through this symposium. Let's enjoy this a once in a lifetime opportunity together.

● Nanami Shizu (Department of Sport & Leisure Management 2nd year)

I will introduce our school song “Kengaku No Uta”. This song is 4 minutes long. It is sung at all the campuses of Tokai University. Tokai University stated as an Aviation Science College. This song was written by Matsumae Shigeyoshi who established our university. He puts his hopes for young students in this song. This song was written by 1943 shortly after the university was established. This song contains his ideas of education. Exactly the three words “thought” “science” and “technology” are his key ideas. In addition, the song speaks of the view of the Japan’s World Heritage Site. Such as “Mount Fuji” and “Miho no Matsubara”. By the way, my favorite phrase is “Susume Kibouno Hoshi Aogi”. It means to go into the future with hope. This phrase encourages me and the origin of the ship “Bosei Maru” we ride. Please listen to our song and feel its wonderful message.



3. Discussion Theme and Comments from Each Sessions

3-1. Intercultural Communication

① Discussion Themes

Q1- What are the challenges?

- What are the problems when people are ethnocentric?
- What are the problems when people stereotype others?

Q2- How to help solve the problems?

- How can we help people not be ethnocentric?
- How can we help people not stereotype others?

Q3- What message do you have for the people you have met today?

Keywords: Country, Stereotype, Ethnocentrism, Nationality, Miscommunication



② Comments from Tokai Student

A symposium was held with CMI students from the Marshall Islands. During that time, I had a school tour and a meal with a CMI student. After the meal, we had a group discussion. I had a discussion on the theme of “difference about culture communication”. We believe that we were able to understand the differences between what we think of each other. Question 1 was about stereotypes. Although they seemed to be thinking the same thing about stereotypes, they were shocked by the difference in the situations they felt. In Question 2 we talked about the solution. I felt that we were thinking the same thing about this. After

the discussion, we were able to get excited about anime. I remember having a lot of excitement about talking and sharing about Ghibli productions. A common topic of Japan and Marshall Islands was anime, and I had a great time.

3-2. Education

① Discussion Tames

Q1- What are the challenges?

- At schools (basic education)
- In Communities

Q2- How to help solve the problems?

- How can we help all children to learn as college/university students?
- What can we do to make communities better as young adults?

Q3- What message do you have for the people you have met today?

Key Words: Basic Education, Community Education, Knowledge and Skills, Experience, Relationships

② Comments from Tokai Student

CMI student's opinion was that there were few educational settings and teachers. In particular, I was empathetic as there were few teachers. It seems that there are only two teachers in the field where CMI students who were in our group are studying at the symposium, and it turns out that there are fewer teachers compared to Tokai University. As a solution, students who are studying at CMI said that they would like to go out and learn about their specialized fields, and that they would like to go back to their own country to educate their fellow Marshall Islanders. Now, it seems that most of their support comes from the United States. However, since tuition is expensive and everyone has not enough received education, one of the CMI students said he wanted the support of the government and students who were educated. The content made me keenly aware of my English after the symposium. There was one point where my opinion was not well communicated. However, it was nice to be able to hold a meaningful symposium while feeling the language barrier.



3-3. Marine

① Discussion Tames

Q1- What are the challenges?

- What problems are caused by microplastics on the marine environment?

Q2- How to help solve the problems?

- How can we make better use of our marine and fishery resources?

Q3- What message do you have for the people you have met today?

Keywords: Seaweed, Fish Farms, Microplastics, Processed Products, Fishery Resources

② Comments from Tokai Student

After the symposium, I think it was easier to discuss marine issues in English than other topics. Everyone knew about marine affairs, so many opinions came out and the conversation never stopped. The problem of garbage in Majuro can be seen as very serious especially when strolling around the city, so CMI students were serious about facing this problem. Since the island nation is similar to Japan, the people of the Republic of the Marshall Islands have many opinions



from the perspective of protecting marine life, specifically using the rich marine ecosystem. What happens when plastic garbage enters the sea is a problem many people expressed their views on, especially the economic impacts for each country. I think that they discussed the problem of garbage pollution from various perspectives well. I also think this conversation with CMI students was a good opportunity to learn their thoughts on marine issues. Also, thinking together with people from other countries, I think it was an opportunity to reconfirm that the world should work together to solve problems.

3-4. Agriculture

① Discussion Tames

Q1- What are the challenges?

- What kinds of problems with soil are there in island countries?
- Why healthiness of soil is important in producing foods?

Q2- How to help solve the problems?

- What can we do to protect soils?

Q3- What message do you have for the people you have met today?

Keywords: Water, Plants, Nutrition, Soil, Urine and Feces



② Comments from Tokai Student

I was able to know the differences in agricultural issues between Japan and the differences in agriculture issues between Japan and the Marshall Islands, which are both island nations. Japan is an island country, but the soil and water resources are abundant, and agriculture has long been a thriving. On the other hand, since the Marshall Islands are atolls, they lack rich soil and abundant water resources. In fact, in the Marshall Islands, they dealt with this problem by importing soil or relying on imports from overseas instead of growing vegetables in their own country. CMI students have also taken measures to deal with the problem when vegetables become expensive, and the plan was to grow and supply the vegetables themselves instead of buying them at the store. In terms of soil problems in Japan, the increase in compost due to the increase in imports of livestock feed and the associated excess of soil nutrients were discussed, and the use of the promotion of thermal power generation was introduced as a solution. However, it was good because I was able to interact and learn as much as I could.

3-5. Health and Welfare

① Discussion Times

Q1- What are the challenges?

- What kind of problems do people have using medical services in your country? Especially for whom, for where, and what expenses (i.e., Covid 19 pandemic).

Q2- How to help solve the problems?

- What can be done to prevent problems of access to medical services?

Q3- What message do you have for the people you have met today?

Key Words: Vaccine, Remote, Insurance, Medical expense, Preventive care

② Comments from Tokai Student

What I felt in discussions with Majuro students was that there was a huge gap between Japan and the Republic of the Marshall Islands in terms of access to medical services. In Japan, there are few hospitals in underpopulated areas and on remote islands, but it is still relatively easy to access medical care. However, Majuro has only one hospital and one clinic, and the number of doctors and nurses is lacking. The CMI students who we talked with are majoring in medicine. After graduating from CMI, they want to study abroad and become doctors, and want to work in Majuro. There is no educational institution where they can get a doctor's license in the Marshall Islands, and I think Japan is blessed in that respect as well. However, it was a common issue for both countries that medical expenses are increasing. I realized that I live and study in a very fortunate environment, and I felt that I have to work harder than ever. I had a short time to interact with the students from CMI, but I was happy to be able to talk to people who study in a country I didn't know about.



4. Preparations and Support for Symposium (from Teachers)

4-1. Purpose and Planning

- Intentions in designing the symposium

In designing this symposium, we focused on the following two points. Firstly, it is not only about cross-cultural exchange, but also about the challenge of introducing academic discussion to university students. Above all, this is not a program within a traditional professional educational setting. The opportunity for students from diverse affiliations and backgrounds to get together and exchange opinions on common themes is valuable and was planned as an



event that makes the most of the characteristics of the overseas educational cruise. Secondly, it was designed to enable everyone to participate, including students with limited English skills or reluctance to interact. For this reason, it was decided to use the method of small group discussions with staged scaffolding to provide linguistic support for the students.

- Preparation process

From 26 February to 5 March, preparations proceeded according to the following schedule (bolded items relate to the symposium). At the same time, the symposium team (25 members) divided the administrative roles and worked on organizing each session, preparing materials for university introductions, making gifts for CMI students, and preparing speeches by student representatives.



	Morning	Afternoon	Night
2/26			Kick Off Meeting for Symposium
2/27	洋上講座	Club Activity	English Class1 (Basic Conversation)
2/28	洋上講座	Club Activity	English Class2 (Basic Conversation)
2/29	洋上講座	Club Activity	Presentation for immigration
3/1	English Class3(A/B) About Session Tames	Sing Practice 1 Symposium Practice 1	Symposium Practice 2 (Check to Session PPT) Preparation by Symposium Team
3/2	English Class4(A/B) About Session Tames	Sing Practice2 Symposium Practice 3	Symposium Practice 4
3/3	English Class5(A/B) (Conversation · Vocabulary)	Clean Up Symposium Practice 5 (mock)	Presentation about Majuro by Research Team
3/4	Immigration	On Majuro	On Majuro
3/5	Symposium at CMI	Departure	

- Results

Based on the day's events, the following achievements and challenges can be described. In terms of outcomes, firstly, all students were able to engage directly with CMI students by joining a group and taking on their specific and predetermined roles. Also, by starting the session with a casual exchange at lunchtime, the exchange of opinions was more natural and conversational which helped the students to move away from a presentation style of format and actively engage with the CMI students. Students who had shown nervousness and reluctance in their preparation were often seen actively talking to the CMI students, and the students were surprised at their communicative abilities, which resulted in them

having confidence that their English was understandable and that they could understand what the others were saying.

(Mieko Ikegaya)

4-2. Communication and Discussion in English

- Summary of Preparation

To prepare non-native English speaking 91 students and 14 faculty for participation in the symposium several approaches were taken. Due to the hesitation that many students from Tokai have about using English, they needed to be coached in such a fashion so as access the language skills that they previously had learned while helping them to overcome their concerns about correct usage of grammar and vocabulary. The students had 5 primary English classes, with 4 supplementary English lessons that emphasized preparing for the symposium. The students were divided into 5 main groups based on themes and further divided into 4 subgroups within each theme with between 4-5 students in each group thus allowing the inclusion of 1-2 CMI students.

- Structure of English Preparation

To help students access prior their prior knowledge of English, the English classes were divided into several lessons. Lessons 1 and 2 presented students with language that would be useful for basic interactions with CMI students and focused on helping students to be able to introduce themselves and use basic opinion-based expressions. These lessons followed a simple lesson plan of reminding students of language that they already know and encouraged them to use it in spoken fashion of the course of 45 minutes. While much of the language was rote, there was room for original usage by the students. For lessons 3 and 4 (each two 45-minute classes), the students were then asked to consider the language that they would need to present information about their university and a specific theme that they were assigned (Agriculture, Education, Health and Welfare, Intercultural Communication, and Marine). Lesson 3 had the students generate necessary language and then progressively move to transforming that language to English. Lesson 4 focused on revising the language they needed and focusing on verbal out-put. The 4 supplementary English lesson (titled symposium preparation) gave the students additional opportunities to practice and revise the language that they sought to use to explain and discuss their themes. The final English class prior to landing in Majuro presented the students with expressions related to interacting with locals in the form of basic travel language and quizzing them on English language terms and vocabulary that they had learned in previous lessons.



- Results

Due to the primary issue of the students not having developed an English language-based identity

independent of their native language, the students required considerable scaffolding to achieve the desired outcomes. The flow from known language to unfamiliar language in terms of lexis and syntax provided the students with a measure of confidence with some students needing to fall back on the known language to give the confidence to interact with learners of English that they perceived as being much more fluent than themselves. By focusing each of the students on a specific theme and allowing them time to process and develop what they anticipated the language they would need, the students were able to interact with the CMI students at a level that surprised many of them. They found that the simple language patterns and that by emphasizing their intended message over syntax was more than enough to them to communicate successfully and articulate their thoughts and opinions regardless of lexical or syntactical errors. Additionally, by gradually removing the support of the teachers from the students and encouraging them to rely on their own language skills, the students gained a greater sense of accomplishment in their interactions with the CMI students.

(Wayne Devitte)

4-3. Singing as the Performance

The 'Kengaku No Uta' (School Founding Song) is a song that is sung at all of the Tokai University campuses. The lyrics were written by Shigeyoshi Matsumae, the founder of the school, around May 1943, shortly after Tokai University's predecessor, the vocational school, had opened. It expresses his hopes for young people. The music was composed by Kiyoshi Nobutoki, one of the leading composers of modern Japan.

It was decided that we would perform this song during the opening ceremony of the symposium. As I specialize in choral instruction, I was to provide instruction. In the special environment of students living together on board the ship, we were able to practice the song for about 20 minutes three times in total. From the first practice session, many of the students were relatively vocal, which was a great encouragement to me. On the other hand, although the original piece is a double chorus, in line with the number of times we practiced, we decided to sing it as a single chorus this time.



Two points were particularly important in the teaching: (i) to sing with the spirit of the lyrics in mind, and (ii) to sing with an awareness of the characteristic rhythm of the motifs throughout the song. In particular, as rhythm is an elemental component to music from all over the world, even though it is difficult to convey the content of the stanzas, I actively taught it with the hope that I could share the deep meaning of this song with the CIM members.

Despite the adverse conditions of the weather, which was windy, on the day, I think most students sang beautifully. Many CMI students were seen taking videos of us singing. For the next challenge, we would like to try the original double chorus.

(Daiju Misawa)

5. Overall review by the Symposium Leader (Student)

Preparation of symposium were started from the kickoff meeting on February 26th, a week ago. The symposium team was to prepare handmade presents, write student speeches, and complete some documents for the symposium. All of the students had basic English classes and special classes for the symposium themes which Wayne mainly taught.

Our symposium team were quick to prepare emailer than planned. This was true especially for the student speeches scripts which were done quickly. Each student speaker was able to practice well. The student speaker team's goal was to memorize their scripts and speak fluently. It was the common goal for all four of the student speakers. "I understand clearly about English, but I took on the challenge of this speech even though it was a lot of work for me. I can realize Japanese version of script, but the English, that's the different story. Those languages have different type of grammar so that is the one of the hard points." This was reported by one of the student speakers' team, Nanami Shizu. The student speakers' team practice included my own self, and we practiced together and had rehearsals until right before the symposium. For

the preparation of the symposium, the symposium team worked hard to assemble the handmade presents for the CMI students. The presents were picture frames with an origami crane alongside a specific kanji in calligraphy written by a student. The Kanji was written by some students who are good at calligraphy. Even though some of the students are not good at calligraphy, their hearts were well expressed though their efforts to prepare the presents. No matter our calligraphy skill, everything was done with joy.



All the 91 students got together in the student mess room with Wayne leading the English class. The first lessons showed that many students were confused about English communication and how to express themselves. However, it turned into a passionate class, where they tried to use expressions known by them through Wayne's lecture and support. We had two English lessons before it was time to move practicing and diving more deeply into the expressions and vocabulary we needed for the symposium. The student faces became dark as they were really worried about having discussions with English speakers. Each theme was difficult to discuss even with Japanese people in Japanese. For instance, in the intercultural communication group, we discussed the problem of stereotyping. We talked theme in Japanese first, then translated that. Finally, we practiced as if we were in the symposium. Because of the difficulty of the theme and how unfamiliar we were all with the topic, we had some difficulty at first to express ourselves even in Japanese. It took time for us to understand what we wanted to say and to find the words to say it. We learned that our English level doesn't matter, but rather that we need to learn to express ourselves and our ideas.

In the next phase, we "translated" our Japanese to English. We helped each to come up with good vocabulary. They built up to vocabulary from easy words. Finally, we moved to the symposium style practice. We had opinion notes and memos of the keywords of symposium, but even so when we started we couldn't talk naturally. Wayne saw this and he gave us good advice." Don't care about vocabulary and grammar too

much, just a word is ok. Let's having big fun and relax your mind." After his advice all of groups changed as their discussions became more active. We did our best preparation at the rehearsal before arriving at Majuro.

After our 1st day of activities in Majuro, it was time to have the day 2 symposium. After a bit of a transportation issue as we had 91 students and CMI being a much smaller school with only a few small buses, we held opening ceremony. The ceremony progressed from a CMI professor's speech, and our cruise leader speech, to Tokai student speech's. The Tokai student speeches were confidently and naturally delivered, and I think that the result was quite good due to the many practices. At the end of the Tokai speeches and the founding song the courtyard was filled by happy applause. We had the symposium after a campus tour of CMI and lunch. From the campus tour, I was deeply touched by the CMI's education "philosophy". In Tokai university it is "Kengaku No Seisin" (The spirit of our university). In one of the buildings they had an exhibition with a traditional marine map known as "stick map" along with an outrigger canoe. The CMI student told us "These instruments are two and one (a set) with CMI's philosophy. The message is "To be a navigator who graduates from CMI". It shows that CMI student are leaders of the Marshall Island and the world just as their ancestors voyaged across the Pacific by using marine map and outrigger canoe. I was deeply touch by the spirit and philosophy of CMI.



Our symposium started; Tokai university introduction, (ice breaker) theme introduction, with more details and introduction of theme and how ideas about to solve the problem of theme. It took about 30 minutes. Each student in their group had part such as Tokai presenter or theme presenter. The symposium was joyful, and everyone was delighted. Each small group was active, discussing and sharing their opinions. In my group discussion, the problems that happen in the Marshall Islands (Majuro) and Japan are similar. For example, some people have stereotyping with mixed race people, which causes some problems and issues. The time passed too quickly, and the symposium had ended.

After the symposium there were closing remarks by the Dean of CMI, a beautiful song sang by the faculty and students with everything ending with the Tokai teachers and students being presented with traditional handmade accessories called "Ammiano" in Marshallese. The song was made us feel very warm and I felt it is similar to the Japanese island song called "Shima Uta". At the end of the ceremony the CMI professor speech," Today a new page in history opens. Don't end the relationships made at today's symposium. Please keep in touch with each other



by using SNS. We are the partners of the Pacific Ocean islands. If you come here to Majuro and please say "I joined the symposium. We will always welcome you all." After the ceremony students took pictures and

exchanged SNS until the buses were ready to take us back to the Bosei Maru.

The symposium was quite a success and left us with big smiles. For during the symposium English classes a student said, “I don’t want to do this anymore.”, but after that student said, “I have a lot of fun!!”. I believe CMI students had the same feeling. From the pictures which were taken at the symposium, it is clear that the students felt “joy”. In Majuro we didn’t take an easy path to learning about the island and its people. We chose to do a symposium and discussed difficult topics in



English. We improved our English. We maybe cannot talk well in English, so this opportunity was very helpful as we practiced and took an approach with the goal to “Discuss each countries problems using English” in mind. With improved our English skill, we also gained confidence about using English through our academic discussions at the symposium. Through this opportunity we broadened our views, learning that Japan is part of a larger world, and we are citizens of Earth. As we live, we should live actively to protect our world and the people in it. The Bosei Maru is a vessel (the Tokai education and training ship from which we have lived) where many students with different backgrounds came together. Some of the students graduated university and will start to work from April. After this voyage each student will start new life.

Step by step, for themselves, we can use this great experience to learn how to make choices for ourselves about our futures and how make those futures better. Finally, I would like to extend a special thanks for Wayne who taught us English and helped us prepare for the symposium, Ms. Ikegaya who planned and organized the symposium, and Mr. Misawa who taught us properly how to sing the song of school “Kengaku No Uta”. Lastly, thank you to all who joined the symposium.



I deeply appreciate it all.

(Tomoyuki Sato / Department of Marine Science and Ocean Engineering 1st year)

Editor’ s Postscript (Students)

- To be honest when I heard about the symposium, I couldn't image what to do at first. However, I learned a lot through the symposium. For example, I learned that it is important to try to convey what I want to convey and even if my presentation manuscript is concise and regardless of my low English ability, my ideas can be transmitted to the other party. Based on this experience, I want to improve my English skills and communicate with people from overseas again. (Sintaro Omata / Department of Mechanical Systems Engineering 2nd year)
- I’ve always been very bad at English, and I’ve lived my life avoiding English. However, after practicing with the group members many times, my resistance to English gradually disappeared. On the day of the symposium, when I had a discussion with the local students, I didn’t understand everything, but I

was able to communicate with my poor English. By having this symposium, I realized that I have not been committed to learning and speaking English well. (Yua Shin / Department of Tourism 2nd year)

- The theme of my symposium was health. The introduction of Tokai University, introduction of topics for this symposium, question 1, question 2, and question 3 were performed in that order. I was the leader of question 2 and question 3. We discussed the Covid 19 virus and its impact. Question 2 focused on solutions to the problems that occurred during the outbreak of the Covid 19 virus, which was discussed in question 1. In question 3, I made a summary of the symposium and took a photo with symposium members. I felt that their country had the same problems even though our countries are different. For example, people couldn't go to school, or meet their friends. It was a very valuable and enjoyable time to talk with people from countries like Majuro even though we have differences. We also have many similarities. (Kako Hasumi / Department of Medical Engineering 1st year)
- I attended a symposium on cross-cultural communication. Because, of the preparations, we were able to exchange many views with CMI students. I had a hard time communicating the concepts of ethnocentrism and stereotypes. However, it was good that we were able to understand each other's opinion even in my poor English. It motivates me to learn English because I can enjoy conversations outside of the symposium. I was able to see the differences between the Marshall Islands and Japan from various perspectives by listening to the team's thoughts on other themes of the symposium. (Tamami Terai / Department of Prime Mover Engineering 4th year)

Japan–Marshall Islands Student Symposium (Majuro Symposium) Report (English ver.)
Publisher: Tokai University The 53th Overseas Educational Cruise
Mar 24 2024
(Pictures by Yusuke Matsushima and Photo Club)